

NEWS LETTER

日本の歴史研究を次のステージへ

VOL. 3
2017.9



正倉院文書の熟覧（8月地域連携・教育ユニット研究会）

CONTENTS

- メタ資料学研究センター 新メンバーの紹介…………… 2
- 国立歴史民俗博物館共同研究
「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」
・これまでの活動
【2016年度】
ワークショップ3 第3回・国際研究会…………… 西谷 大・渋谷綾子 4
ワークショップ2 第3回…………… 渋谷綾子 4
平成28年度 全体集会「資料がつなく大学と博物館Ⅱ
—資料情報の基礎とその活用—」…………… 渋谷綾子 5
【2017年度】
人文情報ユニット（旧WS1）研究会 第1回 …… 副センター長 後藤 真 6
異分野連携ユニット（旧WS2）研究会 第1回 …… 三上喜孝 7
異分野連携ユニット（旧WS2）研究会 第2回
…………… 小倉慈司、神戸航介（参加記） 8

- 日本文化財科学会第34回大会でポスター賞受賞 …… 渋谷綾子 9
- 大学博物館等協議会・日本博物科学会でポスター発表…………… 渋谷綾子 9
- 全国歴史民俗系博物館協議会第6回年次集会での報告…………… 渋谷綾子 10
- 千葉大学で総合資料学の授業…………… 副センター長 後藤 真 10
- ・他機関における活動のご紹介
地域歴史文化の基礎を支える歴史文化資料保全の
大学・共同利用機関ネットワーク事業…………… 神戸大学大学院 奥村 弘 11
金沢大学資料館ヴァーチャル・ミュージアムからサブジェクトリポジトリへ
—研究資料の蓄積と利活用を目指した学術資源リポジトリについて—
…………… 金沢大学総合メディア基盤センター 高田良宏 12
企画展示「デジタルで楽しむ歴史資料」と総合資料学…………… 鈴木卓治 13
- 研究メンバー一覧・本事業の体制変更につきまして…………… 14
- メタ資料学研究センター・メンバーの紹介…………… 15
- 2017年度 メタ資料学研究センターの活動…………… 16

今年の春からメタ資料学研究センター長に就きました。一言ご挨拶申し上げます。

このニューズレターも3号となりましたので、あらためて説明する必要はないかと思いますが、平成28年度から、国立歴史民俗博物館では、人間文化研究機構の基幹研究プロジェクトとして「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」を開始し、メタ資料学研究センターを設置しました。私は、この新しいプロジェクトの開始、センターの設立について、この春までは研究推進センター長として、歴博の共同研究とのかかわりを調整していました。

「総合資料学の創成」は、歴博の理念である「博物館型研究統合」をより発展させ、様々な学問分野を統合し、共同利用のための研究基盤をつくり、そこから新しい学問をつくりだそうとするもので、大学共同利用機関が本来目指すべきものです。第3期中期目標・中期計画では、歴博の中核となるプロジェクトです。その将来がかかっていると言っても過言ではありません。

そこで、今年度から、研究推進センターとメタ資料学研究センターとの一体的な運営を推進し、より大きな成果をあげるために、館内を担当する副館長(研究総主幹)が、センター長を兼務することになりました。歴博全体の運営とセンターの活動をよりスムーズに連動させることが私の役割です。

今、歴博は博物館をもつ大学共同利用機関として、研究の可視化、高度化、そして、大学との連携、大学の機能強化への貢献が強く求められています。歴博はこれまでも「博物館型研究統合」の理念のもと、博物館をつかって、共同研究の成果などを発信してまいりました。さらなる研究の可視化、高度化が求められているということです。そして、研究資源の共同利用基盤を構築して、文科系、理科系にかかわらず様々な分野からの共同利用を促進していく必要があります。そういった意味で、この基幹研究プロジェクトとメタ資料学研究センターの果たす役割は大きいと考えています。

昨年1年のセンターの活動を振り返りますと、人文情報学からの研究については、一定の成果をあげていると思います。しかし、研究基盤として統合するための研究そのものについての成果・蓄積は、いまだ十分とはいえません。共同利用のための基盤構築には、日本の歴史文化に関するモノ資料そのものの着実な研究が必要です。今年度は、そういった点にも目配りしつつ、センターの運営をしていきたいと思っています。

ただ、このようなプロジェクトは歴博だけでできるものではありません。全国の大学や研究機関等との連携があっはじめてできることです。皆さまの積極的なご協力・ご参加をお願いします。

内田 順子

映像資料の研究に私が初めて携わったのは2004年のことである。国立歴史民俗博物館が所蔵していた古い映画フィルムとの出会いがそのきっかけであった。そのフィルムは、1930年、スコットランド出身の医師で、考古学や人類学的な研究もおこなったニール・ゴードン・マンローという人物が、北海道平取町二風谷地域のアイヌ民族のイヨマンテ(クマの魂を神の国に送り返す儀式)を撮影したものである。フィルムベースにナイトレートセルロースが使われた35ミリフィルムで、劣化が進むと自然発火することから、このフィルムの保存・活用についての問題を解決する必要があった。

まず、ナイトレートフィルムの適切な保存方法や、フィルムのジェネレーション(オリジナルの撮影フィルムから何世代目か)を調べるために、フィルム保存の専門家や技術者たちの協力を得た。写っている内容については、日本とイギリスの研究・教育機関が所蔵する関連資料との照合のほか、二風谷地域の人びとやアイヌ文化を専門とする研究者との共同調査などにより、多くの情報を得ることができた。さらに、著作権等の権利処理については法律の専門家の助言を得て、また、アイヌ民族の肖像の公開方法については、二風谷地域のアイヌ民族の方がたと相談を重ねて解決策を見出していった。

以上の調査の成果は、歴博民俗研究映像「AINU Past and

Present-マンローのフィルムから見えてくるもの」(102分、製作・著作：人間文化研究機構国立歴史民俗博物館、製作協力：東京シネマ新社、日本語版2006年、英語版2007年)、『国立歴史民俗博物館研究報告』168号「マ



マンロー撮影の35ミリフィルムより

ンローコレクション研究一写真・映画・文書を中心に」、2011年)にまとめたほか、現在、データベースの公開を準備している。ひとつの映画フィルムを出発点に、研究分野を超えた視点から統合的に分析し、高度な共同利用・研究につなげるという、総合資料学が目指していることの萌芽的な研究を、はからずも実践していたのではなかったかと思う。

映像を多様な視点から研究することによって、伝承調査や物質文化調査がより豊かになることは間違いない。また、その成果のアウトプットの方法という点でも、新たな映像表現やプログラム構築の開発につながる可能性を有している。歴博が所蔵している映像資料を開いてゆくことによって、その研究におけるポテンシャルをいっそう高めていきたい。

7月1日付で国立歴史民俗博物館に赴任し、総合資料学「地域連携・教育ユニット」に加わることになった。日本近世・近代史を専門分野としており、18世紀から19世紀における政治や文化、思想的推移をととした日本列島社会の変容過程をテーマとしている。あわせて、史料学的アプローチとして古文書料紙の光学的分析、古文書の蓄積・伝来経過を通じた地域歴史文化資料の形成過程を検討している。

前任地である東北大学災害科学国際研究所では、2011年の東日本大震災をはじめ自然災害により被災した歴史文化資料の救済・保存活動に従事し、保存科学や文化財修復などと歴史学との連携をととした資料保存の可能性を検討してきた。また、地域に伝来する歴史文化資料の災害対策および次世代への継承にむけた方法論の構築を進め、地域歴史文化資料の防災・減災にむけた保存・継承を目指してきた。

各地域に伝来する歴史文化を象徴する資料は多様かつ膨大である。これまで各地で自然災害が発生するたびに、地域歴史文化資料の保存と継承に関わる問題が提起されてきたが、東日本大震災以降は各地の大学や博物館をはじめ、地域の歴史文化に関わる機関や研究者等が果たすべき役割を真剣に議論する機運が高まっている。

1995年の阪神・淡路大震災以降、自然災害から地域歴史文化資料を救済し、次世代へと継承する取り組みが活発におこなわれている。「資料ネット」と総称される各地での取り組みは、その多くが大学や博物館などが中核となり、地域行政や市民と連携しながら地域に残された歴史文化資料を調査・保存するなかで、各地域における歴史文化のあり方を検討する点に共通性を有する。「資料ネット」活動は、地域社会と歴史学との接合点を模索する、文献史学を中心とした取り組みとして注目されるが、地域歴史文化資料は、古文書などの文献史料に留まらず、民具や美術品、考古資料など多岐にわたる。そのため、地域の歴史文化を総体的に調査し、保存・活用を目指すためには多様な専門的知見を踏まえた活動が必要となる。

こうした状況を踏まえ、総合資料学では、地域歴史文化資料を保存・活用する過程において、大学や博物館等が地域社会のなかでどのような役割を果たすことができるのか、さらに地域社会や大学・博物館などに蓄積された歴史情報から新たな歴史的・文化的意義を発信するためには何が求められるのか、複合的な分析視角に基づく歴史的・文化的意義の発見と共有に向け、取り組んでいきたい。

筆者のももとの専門は近代西洋科学史(数学史)であるが、指導教員が情報学研究者であったことから、歴史史料研究の支援ソフトウェア構築や、画像処理技術の応用について研究を行ってきた。現在は、人文情報学分野に専門を移して活動している。総合資料学プロジェクトでは、人文情報学ユニット(旧WS1)に所属し、博物館資料のアクセスモデル構築を担当する。本稿では、最近の筆者の仕事と今後の展望について簡単に述べたい。

ここ数年、筆者は地震学研究者が主催する「京都大学古地震研究会」に参加し、前近代の災害史料を翻刻する活動に携わっている。日本国内で計器を用いた地震の観測が開始されるのは19世紀末のことなので、それ以前の地震について情報を得るには文献史料に頼らねばならない。しかし、膨大な量が残されている地震史料に対して、くずし字で書かれた古文書を解読できる専門家の数はごく僅かである。そこで、多数の市民の協力を募り、Web上で一挙に地震史料の翻刻を進めることを目的にした『みんなで翻刻』(<https://honkoku.org/>)というプラットフォームを開発し、2017年1月から公開している。『みんなで翻刻』には、公開から半年あまりで3,000人を超える市民が参加登録し、これまでに185点の史料が翻刻された。入力された文字数は250万字にのぼっている。今後は、災害史料だ

けではなく、前近代の歴史史料一般に対象を拡大していく予定である。現在開発中の総合資料学Webプラットフォームとも、何らかの形で連携できればと考えている。

現代は人文学にとって冬の時代と言われるが、『みんなで翻刻』にこれだけの数の参加者が集まったことから、人文学や歴史学に寄せられる社会の関心が大きく減じたようには思えない。しかし、情報流通の中心がインターネットに移行し、人間が生活の中で接する情報量が爆発的に増大する中で、これまで出版によって支えられてきた人文学の地位が、相対的に下落しつつあることもまた否定できない。このような状況で、人文学と情報処理の両分野に通じた人間がなすべき事は明確で、膨大な人文学の蓄積を、インターネット上で自由にアクセスできる形で公開し、その上に活発な情報流通が発生するためのシステムを構築する必要がある。

総合資料学は、まさにこのようなタイプの取り組みであると筆者は理解している。ただ筆者自身は日本史や博物館学の専門家ではなく、様々な面で力不足である。プロジェクトに関わる皆様のご助力ご高配を賜りつつ、総合資料学が目標とする博物館資料を利用した高度な共同研究の実現や、新しい日本史像の構築に向けて研究を進めていきたい。

これまでの活動

ワークショップ3 第3回・国際研究集会

西谷 大
渋谷 綾子

日時 2017年1月28日(土) 13:00~17:00
1月29日(日) 10:00~15:00

会場 国立歴史民俗博物館 第1会議室

第3回のワークショップ3は、海外の最新の状況も視野に入れるため、国際研究集会として計画した。当日の共同研究の課題は「総合資料学と展示・教育活動モデルの構築」である。台湾と韓国からお二人の研究者をお招きし、1月28・29日の2日間開催した。日程は以下の通り。

ワークショップの内容

1月28日

- ◆ **報告1** 「研究会の趣旨と総合資料学の問題点」
西谷 大 (国立歴史民俗博物館)
- ◆ **報告2** 「総合資料学とシステム構築」
後藤 真 (国立歴史民俗博物館)
- ◆ **報告3** 「博物館資源と数値人文—以「臺史博」為例」
謝 仕淵 (国立臺灣歴史博物館)
- ◆ **報告4** 「韓国博物館所蔵品統合DB構築事業と文化遺産標準管理SYSTEM」
権 赫山 (韓国国立中央博物館 遺物管理部)

討論

1月29日

- 会場** 東京国立博物館
- 全体説明** (後藤)
- 解説** 「国立博物館所蔵品統合検索システムと東京国立博物館でのデジタル化」 村田良二 (東京国立博物館)
- 討論・展示調査**

1日目の28日はまず、各国で博物館の資料のデジタル化をどのように行い、利用しているのか、また現在の問題点と今後

の方向性について、それぞれに紹介しつつ討論を行った。歴博からは総合資料学の概要と経緯を説明するとともに、ワークショップ1に関わって、現在進行している歴史資料の情報化モデルの説明と、システムの実演を行った。

国立臺灣歴史博物館の謝仕淵先生には、博物館における資料のデジタル化とその運用について紹介していただいた。デジタル技術を展示に利用しながら、観客調査を行いさらに改善していくという、いわば資料に関わる多様な研究を循環させていく方法を確立させようとしてされており、この試みは、歴博よりはるかに先進的である。

韓国国立中央博物館の権赫山先生には、韓国が国家事業として取り組んでいる、博物館所蔵資料の統合データベースと、その管理システムについて紹介していただいた。韓国内の博物館のデータベースがすでに1つのシステムで統合されて、検索機能や資料画像の利用が個々の博物館単位ではなく、国内の博物館全体のさまざまな資料群を一つの資料群として利用可能であるという状況には、驚きを感じた。

2日目の29日は東京国立博物館へ赴き、所蔵資料検索システムとデジタルアーカイブについての解説を受けた。

解説の後の討論では、文化財の修復方法、動画や音声を含めた所蔵資料の管理システムやデータベース化の状況などに関する質問が出され、台湾・韓国の状況との違いについても話し合われた。昼食後、常設展の展示状況調査を主に行った。



歴博からの報告の様子



東京国立博物館での解説

ワークショップ2 第3回

渋谷 綾子

日時 2017年2月11日(土) 13:00~17:00

会場 国立歴史民俗博物館 第1会議室・第1調査室

2017年2月11日、ワークショップ2の第3回を開催した。開始挨拶に続き、出席メンバーの自己紹介が行われた後、構築中である共同利用基盤プロトタイプの前進の報告があり、画像参照機能について意見交換がなされた。その後、第1調査室へ移動し、ワークショップ2の担当者と館内教員による報告が行われた。

各報告の後に、正倉院文書の複製と製作時の記録メモ(小倉報告)、越前島津家文書第三巻(赤松入道円心一見状)ほか5点(小島報告)、木地師文書ほか3点(小池報告)の熟覧が行われ、渋谷報告では、デジタルマイクロスコープVHX-6000(キーエンス社製)による小島報告で用いた文書の紙の拡大観察が実施された。

同じ歴史学でも古代と中世の文書における情報の違いが取り上げられ、民俗学研究では民俗表象としての書誌を改めて見つめ直すことが求められているなど、さまざまな視点から古文書を検討することとなった。さらに、文化財科学の分析手法によって取り出された文書の情報(特に紙の情報)は、新しい文書の研究へ貢献できるとの意見もあり、まさに、総

合資料学のめざす研究スタイル「一つの資料からいかに多くの情報を引き出し、それらを有機的に結びつけていく」を、このワークショップでは実践することができた。



資料熟覧の様子



デジタルマイクロスコープでの観察

ワークショップの内容

- ◆ **報告1** 「正倉院文書の複製を活用する」
小倉慈司 (国立歴史民俗博物館)
- ◆ **報告2** 「中世古文書の多様な情報」
小島道裕 (国立歴史民俗博物館)
- ◆ **報告3** 「民俗研究における文書の扱い」
小池淳一 (国立歴史民俗博物館)
- ◆ **報告4** 「古文書を顕微鏡で観察する」
渋谷綾子 (国立歴史民俗博物館)

「資料がつなく大学と博物館Ⅱ—資料情報の基礎とその活用—」

日時 2017年3月20日(月)祝 10:00~17:00

場所 東京工業大学 大岡山キャンパス レクチャーシアター (西5号館3階 W531講義室)

2017年3月20日に平成28年度全体集会を開催した。内容は右の通り。

千葉大学の小沢先生からは「デジタル時代」の歴史的な背景やこれまでのありかた、これから目指す方向性などについてご講演をいただいた。午後からは平成28年度の活動報告を各ワークショップ(現ユニット)代表者が行い、これらの報告に対してメンバーがコメントとしてそれぞれの意見や希望を述べた。

さらに、京都大学総合博物館の岩崎先生からは、京都大学でのアーカイブズやデータベースの実態と課題を述べられるとともに、総合資料学プロジェクトへの意見や希望を総評としていただくことができた。

当日の参加者は発表者を含めて47名、各活動報告の後の質疑応答や全体討論では多数のご意見等を頂戴した。こうした意見を、平成29年度の活動に活かしていくつもりである。

ワークショップの内容

開会・趣旨説明 西谷 大 (国立歴史民俗博物館)

講演 「デジタル時代の歴史実践：総合資料学の未来」
小沢弘明 (千葉大学)
聞き手 久留島浩 (国立歴史民俗博物館)・
西谷 大

◆報告1 後藤 真 (国立歴史民俗博物館)
コメント 宇陀則彦 (筑波大学)

◆報告2 三上喜孝 (国立歴史民俗博物館)
コメント 原山浩介 (国立歴史民俗博物館)

◆報告3 西谷 大 (国立歴史民俗博物館)
コメント 齋藤 努 (国立歴史民俗博物館)

総評 岩崎奈緒子 (京都大学総合博物館)

全体討論

閉会



後藤氏の報告



会場の様子

人文情報ユニット（旧WS1）研究会 第1回

副センター長 後藤 真

日時 2017年6月2日(金) 13:00~18:00

会場 東京大学福武ホール地下1階 東大史料編纂所大会議室

2017年6月2日、ワークショップからユニットと名称を変え、最初の研究会を実施した。

最初の研究会は、昨年度協定を結んだ東京大学史料編纂所との共催にて実施した。とりわけ人文情報学の現在を伝えるということを狙いとし、公開形式の研究会として実施した。内容は、まず史料編纂所との歴博のデジタル化事業の現在について報告が行われ、続いて木簡・経典関係に関する最新のデジタル化の研究報告が行われた。その後、当館に4月より着任した橋本雄太氏より「みんなで翻刻」の研究成果を中心に発表が行われた。最終的な討論でも、地名情報をいかに集積するかなどの検討を含め、多くの論点が出された。人文情報ユニットが構築する共

同利用基盤のファーストバージョンは、今年度に公開を予定している。そこに向けて、知見を蓄積する研究会となった。



後藤氏の報告



橋本氏の報告



総合討論

研究会の内容

開会挨拶 山家浩樹（東大史料編纂所附属前近代日本史情報国際センター長）

◆ **報告1** 「史料編纂所歴史情報処理システムの今と新たな日本史情報の活用」
山田太造（東大史料編纂所）

◆ **報告2** 「歴史資料情報の共有と活用—荘園絵図データの活用を事例に—」
後藤 真（国立歴史民俗博物館）

◆ **報告3** 「字形画像による情報検索技術の可能性と課題」
末代誠仁（桜美林大学）

◆ **報告4** 「仏教研究におけるデジタル化資料の利活用」
永崎研宣（人文情報学研究所）

◆ **報告5** 「学習をベースにした災害史料クラウドソーシング翻刻」
橋本雄太（国立歴史民俗博物館）

総合討論

司会：金子 拓（東大史料編纂所）

パネリスト：山田太造、後藤 真、末代誠仁、永崎研宣、橋本雄太

閉会挨拶 林部 均（国立歴史民俗博物館副館長）

日時 2017年7月22日(土) 13:00~17:00
7月23日(日) 9:30~17:00

会場 国立歴史民俗博物館

2017年7月22日と23日の2日間、異分野連携ユニットの研究会が、共同研究『『聆涛閣集古帖』の総合資料学的研究』の研究会との合同で行われた。

『聆涛閣集古帖』は、江戸時代後期から明治初年にかけて編纂された古書類聚の模写図録で、歴史学、考古学、美術史、民俗学、文化財科学など、さまざまな視点から研究を進めることができる可能性を秘めた資料である。総合資料学の研究対象としてふさわしい館蔵資料として昨年度より注目してきたが、今年度より、公募型共同研究『『聆涛閣集古帖』の総合資料学的研究』（研究代表者・藤原重雄・東京大学史料編纂所准教授）を正式に開始することになり、今回はその合同研究会を実施することになった。

研究会の内容

7月22日（大会議室・第1調査室）

大会議室に集合した後、第1調査室において、『聆涛閣集古帖』ならびに関連する館蔵資料の熟覧を行った。

7月23日（大会議室）

研究会

- ◆ 報告1 「近世好古図譜研究の諸前提」
一戸 渉（慶應義塾大学斯道文庫）
- ◆ 報告2 「『集古十種』版本の流布について」
佐藤洋一（福島県立博物館）
- ◆ 報告3 「『聆涛閣集古帖』のデジタルデータ化と閲覧システム—IIIFの活用—」
後藤 真（歴博）

今後の調査研究の方法についての意見交換

1日目の資料熟覧においては、集古帖の実物資料やその関連資料の観察、さらには彩色の分析を通じて、集古帖がどのような素材をもとに、どのような段階を経て編集がなされていったといった点について、さまざまな情報を引き出すことができる可能性があることを確認した。熟覧後は有益な意見交換が行われ、今後さらなる実物資料の分析を行う必要を痛感した。

2日目の研究会においては、まず一戸、佐藤両氏から、

藤貞幹『集古図』や松平定信『集古十種』など、近世の好古図譜の系譜やその流布について、詳細な研究発表がおこなわれた。これらはいずれも、『聆涛閣集古帖』の資料的意義の前提となる内容で、近世の思想史・文化史的な流れについて、分野の異なる共同研究員の間で、基礎的な理解を共有することができた。今後はこうした近世の思想史・文化史的な状況への理解をふまえた上で、『聆涛閣集古帖』の個別的な検討に入っていくことになる。

後藤氏からは、人文情報学の立場から、異なる資料の比較をWeb上で可能にするIIIF（トリプル・アイ・エフ）や、メタデータの記述モデルであるRDFなどを駆使することによる、『聆涛閣集古帖』の研究成果公開の可能性の広がりについての発表が行われた。『聆涛閣集古帖』は、同時期のさまざまな好古図譜との比較や、描かれたモノと現物資料との比較、といったさまざまなレベルでの比較が可能な資料であり、資料のもつ多様な情報を最大限に引き出すためにも、デジタルネットワークを構築する必要があることが確認された。



『聆涛閣集古帖』の熟覧



研究会の様子

異分野連携ユニット（旧WS2）研究会 第2回

小倉 慈司

日時 2017年8月2日(金) 13:00~17:00

会場 国立歴史民俗博物館 第1調査室

2017年2月に開催した「古文書を多角的に分析する」を承け、今回は正倉院文書複製に焦点をあて、特に若手研究者に広く参加を呼びかけるかたちで開催した。20名程度を予定していたが、予想を超える33名の応募があり、体調不良による欠席を除く32名が参加した。概要については参加記を参照されたいが、若手研究者に正倉院文書複製の活用方法を知ってもらうという当初の目的は概ね達成できたと考える。課題としては、参加者の専門が古代史と日本語学にかたよったことである。これは募集方法に起因するものであり、今後、古代史以外に専門分野を持つ研究者を巻き込んだ形で実施する方策を検討していきたい。

研究会の内容

ユニット代表挨拶・趣旨説明

- ◆ **報告1** 「文書のカタチと成り立ち」
佐々田悠（宮内庁正倉院事務所）
- ◆ **報告2** 「正倉院文書自在閲覧システムの紹介」
仁藤敦史（国立歴史民俗博物館）
- ◆ **報告3** 「正倉院文書複製からわかる？ 原本所見—『正倉院文書目録』の記述内容」
山口英男（東京大学史料編纂所）
- ◆ **報告4** 「正倉院文書複製の制作過程」
小倉慈司（国立歴史民俗博物館）

意見交換（以上にてワークショップ終了）

総合資料学メンバーによる意見交換

参加記

東京大学大学院 院生 神戸 航介

2017年8月2日、正倉院文書ワークショップが開催された。正倉院文書の複製事業は、国立歴史民俗博物館（以下、歴博）が開館当初から継続してとりこんできた、歴博の中核的な事業である。ほとんどの研究者が正倉院文書の実物を調査することが不可能である以上、精巧な複製の製作は極めて重要な意味がある。しかしながら、これまで歴博所蔵の正倉院文書の複製が研究者に活発に利用されていたとは言いがたい状況であった。そこで今回のワークショップでは、若手研究者を主たる対象として、正倉院文書の実物調査に長年携わってきた方々が講師として、実際に複製を目の前に置き参加者とともに囲みながら、複製を利用する際のポイントや今後の研究の可能性などを解説された。

当日は上記のスケジュールで進められた。宮内庁正倉院事務所の佐々田氏は、経巻の作成の際に写経料紙の両端に貼り継ぐ余白（端継）が、作業の途中ではがされたり切り離されたりするが、これが写経所の事務用の紙として再利用される事例などを紹介し、文書の形態から写経の作業工程の具体像を復元するという最新の研究動向を解説した。『大日本古文書』の翻刻では知ることのできない実物の状態に即した研究の方法論が示され、それは複製によってもかなりの程度可能であると述べられた。史料編纂所の山口氏は、同所が編纂している『正倉院文書目録』の記述がどのような原本所見をもとに作成されているかを解説し、その所見が複製を用いても得られるものなのかを、多くの事例を挙げて説明した。他文書の墨写りや他の料紙を糊付けした痕跡などは複製でも確認できるが、角筆の勾点など立体

的な情報は複製から読み取るのが困難であるなどの注意点が指摘された。最後に歴博の小倉氏が、正倉院文書のコロタイプ複製の作業工程や熟覧の方法、利用に当たって留意すべき点などを紹介し、今後の複製利用の活性化を呼びかけた。

正倉院文書の研究にはかなりの専門性を要するが、現在授業等で正倉院文書を専門的に扱っている大学は、史料編纂所がある東京大学を除けばほぼ皆無である。しかし、今回のワークショップは関東近郊の大学院生を中心に多くの参加者を獲得し、活発な質問や意見が飛び交い、若手研究者の正倉院文書への関心の強さを感じることができた。今回のような試みを今後も継続していくことを強く希望する次第である。



正倉院文書複製からわかる？ 原本所見—『正倉院文書目録』の記述内容

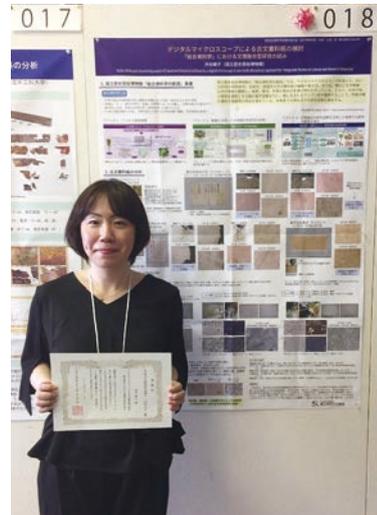
日本文化財科学会第34回大会でポスター賞受賞

渋谷 綾子

2017年6月9～11日に東北芸術工科大学で開催された日本文化財科学会第34回大会において、ポスター発表を行い、学会表彰としてポスター賞をいただいた。

ポスターの発表タイトルは「デジタルマイクロscopeによる古文書料紙の検討：『総合資料学』における文理融合型研究の試み」で、今年2月の旧ワークショップ2・現在の異分野連携ユニットで行った「古文書を多角的に分析する」から派生した文書料紙の研究を扱ったものである。研究会でお借りしたデジタルマイクロscope VHX-6000（キーエンス社製）を再度借用し、当館の小島道裕教員とともに館蔵資料を観察した内容と文書に使用された糊の製作実験について報告した。ポスターセッションでは、多数の参加者から、自然科学分析による文書料紙の研究が文化財レスキューへのアプローチにつながるのではないかと、など好意的なご意見や質問を頂戴した。

小島先生をはじめ、資料の調査でご教示をいただきました先生がたに心より厚く御礼申し上げます。



発表ポスターと表彰状

大学博物館等協議会・日本博物科学会でポスター発表

渋谷 綾子

2017年6月22日～23日、第20回大学博物館等協議会・第12回博物科学会が山形大学・小白川キャンパスで開催された。

歴博は大学博物館等協議会へ昨年度（平成28年度）より加盟している。今年度は、大学博物館等協議会においてセンターの三上氏が「大学収蔵資料の調査研究と社会的活用—2つの石碑拓本の実践例から—」という題名の講演を行い、またメタ資料学研究センターのメンバーが入会した日本博物科学会においてポスター発表（後藤・渋谷・橋本）を行った。

大学博物館等協議会の講演2件の後は、「大学所蔵資料の可能性を引き出していくためには」と題したディスカッションで、三上氏を含めた講演者と司会、会場の間で今後の大学博物館としてのありかた、資料の活用などが議論された。

ポスター発表では、『総合資料学の創成』事業における大学間データ連携手法の提案」という題名で、昨年度の日本博物科学会で報告した総合資料学の事業の進捗状況とともに、大学博物館との連携に関わる簡易なデータ入力の手法とメタデータについて発

表した。大学間の連携やデータ入力の手法については多数の質問をいただき、また今後の共同研究の可能性についても意見交換することができた。ほかの大学博物館関係者の発表では総合資料学の研究と密接にかかわるものもあり、こちらも今後の総合資料学の可能性を広げる、よいきっかけとなった。

第20回大学博物館等協議会 講演

「大学収蔵資料の調査研究と社会的活用—2つの石碑拓本の実践例から—」

三上喜孝（国立歴史民俗博物館）

第12回日本博物科学会 ポスター発表

『総合資料学の創成』事業における大学間データ連携手法の提案」

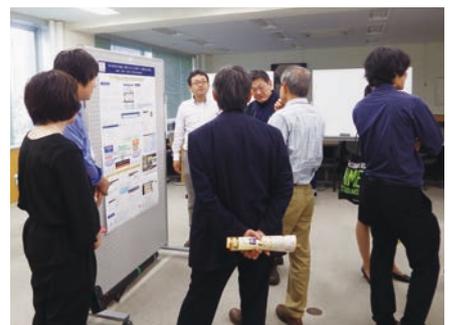
後藤真・渋谷綾子・橋本雄太（国立歴史民俗博物館）



三上氏の報告



ディスカッションの様子



ポスター発表の様子

全国歴史民俗系博物館協議会第6回年次集会での報告

渋谷 綾子

2017年7月13日・14日の両日、全国歴史民俗系博物館協議会（歴民協）第6回年次集会が、九州国立博物館ミュージアムホールで開催された。メタ資料学研究センターからは後藤副センター長と渋谷が参加した。全国歴史民俗系博物館協議会の概要については、ホームページ（<http://www.rekimin.com/>）をご参照いただきたい。

全国各地からおよそ90名近くの方が参加され、研究集会のテーマは第1部が「熊本地震と文化財レスキュー」、第2部が「博物館と地域振興」であった。「総合資料学の創成」事業としては、昨年の第5回年次集会において、これまでの実績と現在の進捗状況を報告している。

今回は、総会で現在構築中の情報基盤について報告を行った。

はじめに、西谷副館長が事業の概要を説明した後、後藤副センター長が現在までの実績とともに、千葉県立中央博物館のご協力を得て構築しているシステムのデモンストレーションを行った。参加者の方からは多数のご意見・質問を受け、興味を持っていただいたようである。本システムは今年度中にデータを整備し、館内限定で公開の予定である。

報告

『総合資料学の創成』事業中間報告（システム対応状況）

島立理子（千葉県立中央博物館）・後藤真（国立歴史民俗博物館）



報告の様子



西谷副館長の説明



システムの実演の様子

千葉大学で総合資料学の授業

副センター長 後藤 真

アクティブ・ラーニング形式で、実施期間に行われていた国際企画展示「台湾と日本—震災とともにたどる近現代—」のコンセプトをもとに、千葉大学の学生の皆さんに「中学生や小学生に台湾と日本の震災についてよりわかりやすく説明できる展示を、他の展示資料と結びつけつつ考える」という授業を実施した。総合資料学が目指す「複数の資料を結びつけ、新たな知識の表現を行う」というテーマを、実際の資料と情報をもとに検討してもらい、最終日には素晴らしい成果発表をしていただいた。

実施内容

（カッコ内は担当教員）

2月13日 於千葉大学

午前 ガイダンス（久留島・崎山・後藤）
震災展のねらいと概要（荒川）

午後 総合資料学とは何か（後藤）
受講生のチーム分けとプレゼンの方向性の検討

2月14日 於歴博（全体のコーディネート：崎山・後藤）

午前 展示見学の諸注意及び震災展見学（樋浦）

午後 他の展示室を見学し質問（久留島・関沢・樋浦・荒木）
館内見学（荒木・後藤）とプレゼンの方向性を検討

2月15日 於千葉大学

午前 プレゼンの作成

午後 プレゼンと講評（講評担当：久留島・樋浦・後藤）



久留島館長による歴博の概要と総合資料学についての講義



歴博館内で展示室と作業スペースを往復しながらの作業



最後のプレゼン準備

他機関における活動のご紹介

地域歴史文化の基礎を支える歴史文化資料保全の 大学・共同利用機関ネットワーク事業

神戸大学大学院人文学研究科 奥村 弘

ネットワーク事業はじまる 今年6月7日、東北大学災害科学国際研究所で、国立歴史民俗博物館と神戸大学人文学研究科と東北大学災害科学国際研究所は、人間文化研究機構が両大学とともに推進してきた「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」に関して連携・協力協定を締結した(写真)。7月には人間文化研究機構6機関、神戸大学、東北大学の担当者からなる事業準備チームが設置され、機構内の事業主導機関である国立歴史民俗博物館に、天野真志氏が配置され、事業が本格的に開始された。

地域史料滅失の危機とその共有 この事業の基礎となったのは、阪神・淡路大震災以来の歴史文化資料保全活動である。阪神以来、2016年の熊本地震に至る迄、日本列島では2、3年毎に震度6を記録する直下型地震が起き、2011年には東日本大震災が起こった。また21世紀に入る頃から、規模の大きな豪雨災害が毎年起こるようになった。阪神・淡路大震災時の歴史資料ネットワークの結成を嚆矢として、大学・博物館・文書館等の関係者、地域の歴史文化に関心を持つ市民によって、大規模災害時に歴史文化資料保全を行う組織として、各地に史料ネットワークが結成された。大規模災害時の活動を通して、日本各地で歴史文化史料保存継承が困難となる危機的状況が歴史文化関係者の間で共有され、日常時においても、地域の歴史文化資料を保全し、次世代に伝えていくための取り組みが重要であることが明確になった。

現在、ほぼ府県単位に20を超える組織が設立され、相互に連携して史料保全活動を進めるようになった(表)。この表からわかるように、各地の史料ネットワークは、各府県の国公立大学の歴史文化関係部門を拠点として組織されることが多い。このことは、地域の歴史文化の継承と発展において地方大学の役割が重要であることを示すものである。

実践研究の持続的展開 このような中で、実践的研究も蓄積されてきた。神戸大学大学院人文学研究科は、阪神・淡路大震災で被災した歴史資料を救出・保全するボランティア活動を踏まえ、2002年に地域連携センターを設置、日常的に自治体や市民と連携して、歴史文化を活かしたまちづくり支援や、地域歴史遺産を活用できる人材の育成を進めてきた。また大学間連携を基本とした災害時の地域歴史資料保全に関する科学研究費(S)の基礎研究組織としての役割も果たしてきた。

東北大学災害科学国際研究所は、東日本大震災を踏まえて、巨大災害へ対処する新たなパラダイム形成とそれによる巨大災害の被害軽減に向けた実践的防災学形成を目標として、2012年に設置された。その重要な分野として、歴史資料保存研究分野、災害文化研究分野が設けられた。歴史資料保存研究分野では、歴史資料を災害から守るための自然科学的な方法も踏まえた具体的なしくみを研究し、社会に還元していく活動を進めている。

人間文化研究機構全機関が共同で進める3つの広領域連携型基

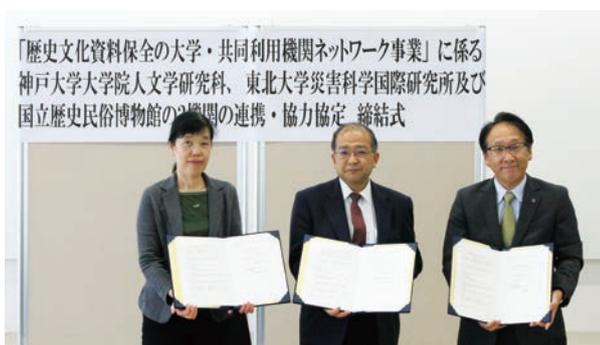
幹研究プロジェクトのひとつ「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」(2016年開始)は、東日本大震災時の各研究機関の多様な取り組みを基礎に、さらに実践的な研究を進め、災害時のみならず、急激に変貌していく日本社会の中で、地域文化を守り育てようとするものである。

大学・共同利用機関のネットワークの重要性 私達が地域歴史文化の危機に対応していくためには、第1に、これらの実践的な研究成果を基礎に、現場で活動する歴史文化関係者を継続的に支援すること、第2に、各地の取り組みの成果を共有化し、全国的なネットワークを形成し、相互支援体制を構築していくことが必須である。史料ネットワークの全国的展開で明らかのように、地域の歴史文化支援の拠点である地方大学の機能を強めていくことが喫緊の課題となっている。そのために本事業では、人間文化研究機構、神戸大学、東北大学等の実践的研究の蓄積をいかして、各地の大学の取り組みを持続的に支援するとともに、各地域での取り組みの成果を大学共同利用機関である人間文化研究機構に積極的に集約し、これを基礎に全国的なネットワーク形成を進めていくことをめざしている。

今年度に入り、神戸大学は西日本、国立歴史民俗博物館は東日本、東北大学は東北の各地域を中心に、関係大学等々の具体的な取り組みについての協議も始まっている。その成果は、来年1月20日、21日に行われる岡山での全国史料ネットワーク研究交流集会上に反映されることになっている。また実践的研究集約と国際的な位置づけを明確にするために、本年11月11日、12日に国際シンポジウム「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立をめざして」を神戸大学で開催することになっている。さらに、このネットワーク形成に重要な意味を持つ、地域歴史資料の総合的研究と活用、そのためのデータベース化については、国立歴史民俗博物館の機関拠点型基幹研究プロジェクト「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」の役割が重要である。地域を構成する多様な人々の関わり合いの中で、地域の歴史資料を研究、活用する方法を具体的に生みだし、地域の歴史文化を支える基盤を形成しうるかどうかが、その進展に注目したい。

表 日本各地の地域歴史資料保全ネットワーク一覧(歴史資料ネットワーク把握分)

名称	成立年	活動府県	成立契機	大学に事務局
歴史資料ネットワーク	1995	兵庫大阪京都	阪神・淡路大震災	神戸大学
山陰歴史資料ネットワーク	2000	鳥取・島根	鳥取県西部地震	鳥根大学
芸予地震被災資料救出ネットワーク愛媛	2001	愛媛	芸予地震	愛媛大学
広島歴史資料ネットワーク	2001	広島	芸予地震	広島大学
資料ネットやまぐち	2001	山口	芸予地震	山口大学
宮城歴史資料保全ネットワーク	2003	宮城	宮城県北部地震	東北大学
福井史料ネットワーク	2004	福井	福井水害	
新潟歴史資料救済ネットワーク	2004	新潟	中越地震	新潟大学
宮崎歴史資料ネットワーク	2005	宮崎	2005年台風14号	
岡山史料ネット	2005	岡山	予防	岡山大学
ふくしま歴史資料保存ネットワーク	2006	福島	予防	福島大学
山形文化遺産防災ネットワーク	2008	山形	予防	
千葉歴史・自然資料救済ネットワーク	2009	千葉	予防	千葉大学
茨城文化財・歴史資料救済・保存ネットワーク	2011	茨城(栃木)	東日本大震災	茨城大学
地域史料保全有志の会	2011	長野	2011/3長野県北部地震	
岩手歴史民俗ネットワーク	2011	岩手	東日本大震災	盛岡大学
歴史的・文化的遺産保存活用連携ネットワーク(三重)	2011	三重	予防	
神奈川地域資料保全ネットワーク	2011	神奈川	予防	横浜国立大学
歴史資料保存ネット・わかやま	2011	和歌山	2011年台風12号	
静岡県文化財等救済ネットワーク	2012	静岡	予防	
歴史資料保全ネットワーク・徳島	2012	徳島	予防	鳴門教育大学
鹿児島歴史資料防災ネットワーク(準)	2013	鹿児島	予防	鹿児島大学
長野被災建物・史料救済ネット	2014	長野(北部)	長野県神城断層地震	
熊本被災史料レスキューネットワーク	2016	熊本	熊本地震	熊本大学



協定書を中心に記念撮影

金沢大学資料館ヴァーチャル・ミュージアムからサブジェクトリポジトリへ — 研究資料の蓄積と利活用を目指した学術資源リポジトリについて —

金沢大学総合メディア基盤センター 高田 良宏

金沢大学資料館では、2009年度より学内のキャンパス・インテリジェント化推進事業の採択を受け、資料館でも利用できる学術資源リポジトリ、すなわち、所蔵資料のデータベース機能とWeb上での仮想展示機能を有した金沢大学資料館ヴァーチャル・ミュージアム（以下、金沢大学資料館VMとする）の実現に向けて取り組み、2011年度に一般公開を開始した。

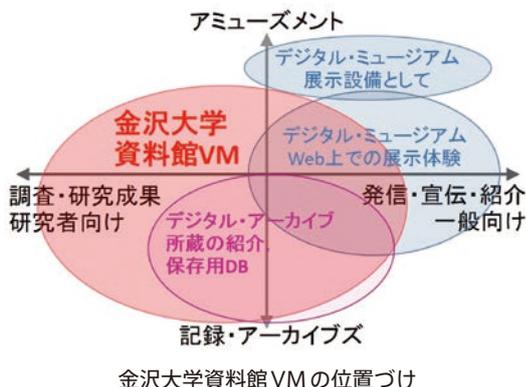
所蔵の非文献資料をデジタル化し、仮想展示する試みはさまざまな機関で行われており、その名称もヴァーチャル・ミュージアムだけでなく、デジタル・ミュージアム、デジタル・アーカイブなど多様である。ただし、デジタル・ミュージアムを名乗る場合は、アミューズメント性が強く、宣伝・紹介が中心で一般向けの傾向にあり、デジタル・アーカイブを名乗る場合は、記録性が強く、調査・研究成果を研究者向けに発信する傾向がある。金沢大学資料館VMは、後者に軸足を置きつつも、前者的傾向を含むというかなり幅広い構想を持っていた。したがって、単に1枚の写真を公開して解説を付けるだけといった類のモノとは一線を画し、写真は様々な角度から何枚も撮影し、高精細で提供できるようにすることとし、説明も学術的に意味のあるものにしようとした。2011年11月の公開当初は、資料館所蔵の第四高等学校物理実験機器等、5種類464点でスタートしたが、その後、附属図書館が所蔵する第四高等学校由来の教育掛図、加賀藩士成瀬正居の日記他の貴重資料も登録するなど対象範囲を広げ、金沢大学資料館VMは資料館の枠を超えた全学的システムとなった。2017年7月現在、次に示す16種類2,100点の公開を行っている。

- 資料館所蔵分：第四高等学校物理実験機器（269件）、きのこムラージュ標本（31件）、医学教示図・掛図（61件）、石川師範学校写真資料（296件）、梅田家資料（682件）、金沢病院設計図（14件）、人物埴輪（2件）、三々塾関係資料（16件）
- 附属図書館所蔵分：第四高等学校教育掛図（262件）、石川師範学校郷土教育アルバム（14件）、金沢城古写真（11件）、成瀬日記（57件）、金沢医学図書館図面（67件）、儀式風俗図会（24件）、加賀藩年中行事図会（39件）
- 医学部記念館所蔵分（同窓会）：皮膚病ムラージュ標本（255件）

非文献資料およびその資料群は、一研究機関にだけ存在していることは稀で、むしろ複数の研究機関にまたがって存在する方が一般的である。金沢大学資料館VMは、一研究機関のリポジトリとしては順調な成長を遂げてきた。しかし、非文献資料を学術的に利用する側の立

場に立つと、各研究機関に所蔵されている資料情報が機関の垣根を超えて共有できる方が重要である。たとえば、金沢大学資料館が所蔵する第四高等学校の物理実験機器は、大学移転に当たって多くの機器を石川県に譲渡したために、現在、石川県立自然史資料館に多数所蔵されている。また、これを旧制高校旧蔵の物理実験機器というカテゴリーでみるならば、京都大学でもそれなりに残存しており、研究者にとってはそれらの情報が共有できることが望ましい。金沢大学資料館VM構築のために開発したメタデータ形式やリポジトリの動作環境は、汎用性を持っており、これが全国的な標準となって普及すれば、こうした要望に応えられるはずである。そこで、2011年11月に生まれたのが、「大学の枠組みを超えた非文献資料のための機関横断的なリポジトリの構築を目指す」非文献資料リポジトリ協議会である。翌年これは、学術資源リポジトリ協議会に発展し、自らのWebサイトに機関の枠を超えた学術資源群（非文献資料を学術的な視点から俯瞰的、意味的に分類した組織に非依存な資料情報の集合）によるサブジェクトリポジトリを設置した。現在、科学実験機器資料と教育掛図資料の2つのサブジェクトリポジトリを運営している（他に1件準備中）。前者では、新潟大学所蔵（20件）、神戸大学所蔵（21件）、東京大学駒場博物館所蔵（22件）、石川県立自然史資料館所蔵（753件）、大阪教育大学附属図書館所蔵（3件）、後者では、石川県立自然史資料館所蔵（126件）、大阪教育大学附属図書館所蔵（61件）、奈良教育大学附属図書館「明治教育文庫」（221件）が公開されている。

さらに、近年、世界的に急速に広まっている研究資料のオープン化およびオープンサイエンスの推進に寄与するため、国内ではいち早くデジタルオブジェクト識別子（Digital Object Identifier：DOI）を科学実験機器資料と教育掛図資料に付与し、国立情報学研究所（NII）などにメタデータを提供している。個々の資料情報に対して、DOIを付与することにより、資料の存在肯定が可能になることと、研究成果と資料および資料と資料を結びつける役割が期待できる。また、「総合資料学」構想との連携については、技術的な調整は必要であるが、既に資料の存在肯定の手段等が確立されており、連携可能と考えている。



植虫等之図
海百合ノ図
教育掛図資料：石川県立自然史資料館所蔵

企画展示「デジタルで楽しむ歴史資料」と総合資料学

国立歴史民俗博物館 鈴木 卓治

平成29年春（2017年3月14日～5月7日）に国立歴史民俗博物館（以下、歴博）で開催した企画展示「デジタルで楽しむ歴史資料」は「歴史資料を人類共有の財産として大切に守り未来に伝えていくと同時に、今を生活しているわたしたちの役に立ていかねばならない」という問題意識のもとに企画した、「パソコンやスマートフォンをはじめとするデジタル技術を利用して、さまざまな形で歴史資料を楽しんでもらおう」という催しであった。展示は「I デジタルで楽しむ絵画資料」、「II デジタルが解き明かす資料のなぞ」、「III デジタルで楽しむ工芸資料」、「IV デジタルで広がる歴史展示の可能性」の4章構成で、合計で13のコーナーに分かれていた。本展は、「多様な『モノ』資料を時代・地域・分野等によって分類し、分野を超えた視点から統合的に分析する」という総合資料学の視点をいかに展示の中に盛り込んでいくかを念頭において企画を進めたものである。以下、例を挙げて説明したい。

「I-2 江戸の景観の移り変わり」では、「江戸名所見比べコンテンツ」というデジタルコンテンツを出展した。このコンテンツは、「江戸図屏風（江戸時代初期）」、「江戸名所之絵（江戸後期）」、「再刻江戸名所之絵（江戸末期）」の3つの絵図を、そこに描かれた江戸の名所に注目して比較することで、時代による景観の変遷や、目線の違い（武士目線か、庶民目線か）による描かれ方の違いを見比べることができる。

図1(a)は品川の景観の見比べの様子である。幕末の景観を描いた「再刻江戸名所之絵」には外国船を打ち払うために設けられた「お台場」が描かれているが、19世紀初頭の景観を描いた「江戸名所之絵」には描かれていない。お台場はまだ築かれていなかったからである。

図1(b)は芝の増上寺の景観の見比べの様子である。「江戸図屏風」は徳川幕府三代将軍家光に近い人物が描かせたとされており、徳川家の菩提寺である増上寺が詳細に描かれているのに対し、観光地図である「江戸名所之絵」、「再刻江戸名所之絵」では、目印となる建物が大きく描かれるに留まり、目線の違いがよくわかる。

本コンテンツはWebコンテンツとして制作しており、スマートフォンやタブレット端末でも動作が可能となっている。このコンテンツは、



(a) 品川の景観の比較



(b) 増上寺の景観の比較

図1 「江戸名所見比べコンテンツ」の画面

参照する絵図と見どころ（江戸名所）の設定は、展示の目的（3つの絵図の見比べ）に即して固定されているが、もしこれが、インターネット等を介して利用可能な任意のデジタルデータが、付与された情報を手掛かりに、与えたキーワードにより検索され、自動的に画面にレイアウトされて表示された結果だとしたら、と想像していただきたい。これが総合資料学の目指す、来るべき「デジタル人文学研究環境」のひとつの典型だと考えている。

「II-1 正倉院文書のなりたち」では、本館後藤真氏の手になる、AR (Augmented Reality、拡張現実感) 技術を用いたデジタルコンテンツを出展した。正倉院文書のうち請暇解（せいかけ、写経所の写経生から出された休暇願）について、展示ケース内の古文書にタブレット端末をかざすと、文書の近くに置かれたキャラクタの絵を手掛かりにして、文書の画像の上に、文字の読み方と、書かれている内容の解説が表示される。今回は、対象となる文書を固定して説明を与えているが、これもやはり、インターネット上から探し出された情報が表示されるとしたら、という総合資料学の青写真を反映したものになっている。

デジタル技術の観点からみた総合資料学の目指す姿は、資料の情報（画像、文章、音声その他のマルチメディア情報）がデジタル化され、可能な限り制約のない状態でインターネット等を介して利用可能となること、さらにそれらの情報を“探し出す”ための検索の技術とインフラストラクチャー（デジタル情報を長時間安定して蓄積・保存し、検索の便に供するためのハードウェア・ソフトウェアならびに管理運営に必要な組織・人員・技術開発・規格化までひっくりめたる社会基盤）が確立され維持されること、である。そして、そのような知識を人間の存続に不可欠な要素として認知・尊重し社会に位置付けていく、わたくしたちの文化の熟成こそが、総合資料学の理念の完成形といえよう。

博物館は、人間文化の熟成に寄与する社会装置として機能することが求められる。歴博（博物館）という環境から生まれた総合資料学の理念は、デジタル技術の進展をベースとはしているものの、むしろともすれば見失いがちになる“人間性”の復権をめざすアプローチなのだとしている。



図2 AR技術を用いた正倉院文書解説コンテンツ

研究メンバー一覽

本事業の体制変更につきまして

総合資料学の研究プロジェクトでは、これまで、人文情報学を行うチーム、文理融合型研究を行うチーム、研究成果を地域や大学教育に還元するチームをそれぞれワークショップ1・2・3と呼称していました。これは、単に研究会を行うだけでなく、資料を多様な視点から見ていくためのワークショップを原則とする研究イメージを当初に想定していたためです。

しかし、それぞれの研究チームが発足し、研究を開始するにつれて、ワークショップのような形態だけではなく、学会や国際会議とのシンポジウムとの共催や、通常のいわゆる研究発表を中心とする形式のものも回数が増えることになりました。また、総合資料学の「歴史資料を多面的に見て、その情報を蓄積・発信・還元する」という目的を達成するためにも、歴博の中や人間文化研究機構の中で行われている様々な共同研究・関連する科学研究費の研究と密接に連携しつつ、研究を進めていく必要が生まれました。

結果的に多くの研究会を共催で行う方向にシフトしつつあります。

このような状況に鑑みまして、2017年度より、チームの名称を変更することといたしました。各チームが何を指すチームなのかをよりはっきりさせるという観点から、ワークショップ1を人文情報ユニット、2を異分野連携ユニット、3を地域連携・教育ユニットとしました。名称が変わっても、それぞれの研究機能は変わりませんし、ユニットごとの連携をしっかりと持たせ、人文情報ユニットで作ったデータを異分野連携ユニットが活用、それらの成果を地域連携・教育ユニットが展開するという構造にも変わりはありません。いずれのユニットも一体となって、研究を進めていけるよう、メタ資料学研究センターのメンバーにて事業を推進してまいります。メタ資料学研究センターのメンバーも3名増員し、より強力で事業を推進できる体制となりました。

引き続き、みなさまのご協力・ご叱正をいただけますと幸いです。

◎ 研究代表者、○ 研究副代表者、各ユニット代表・副代表以外のメンバーは館外→館内の順で五十音順に記載

総括

久留島 浩 (国立歴史民俗博物館)

メタ資料学研究センター長

林 部 均 (国立歴史民俗博物館)

人文情報ユニット (旧WS1)

○後藤 真
(国立歴史民俗博物館)
* 人文情報ユニット代表

橋本 雄太
(国立歴史民俗博物館)
* 人文情報ユニット副代表

宇陀 則彦 (筑波大学)

大向 一輝 (国立情報学研究所)

岡田 義広 (九州大学)

五島 敏芳 (京都大学総合博物館)

新 和宏
(千葉県立中央博物館分館海の博物館)

関野 樹
(総合地球環境学研究所)

高田 良宏 (金沢大学)

研谷 紀夫 (関西大学)

百原 新 (千葉大学大学院)

山田 太造 (東京大学史料編纂所)

内田 順子 (国立歴史民俗博物館)

大久保 純一 (国立歴史民俗博物館)

異分野連携ユニット (旧WS2)

三上 喜孝
(国立歴史民俗博物館)
* 異分野連携ユニット代表

渋谷 綾子
(国立歴史民俗博物館)
* 異分野連携ユニット副代表

岩崎 奈緒子 (京都大学総合博物館)

小川 正人 (北海道博物館)

栄原 永遠男 (大阪歴史博物館)

山家 浩樹 (東京大学史料編纂所)

青山 宏夫 (国立歴史民俗博物館)

荒木 和憲 (国立歴史民俗博物館)

小倉 慈司 (国立歴史民俗博物館)

齋藤 努 (国立歴史民俗博物館)

高田 貫太 (国立歴史民俗博物館)

原山 浩介 (国立歴史民俗博物館)

日高 薫 (国立歴史民俗博物館)

地域連携・教育ユニット (旧WS3)

◎西谷 大
(国立歴史民俗博物館)
* 地域連携・教育ユニット代表

天野 真志
(国立歴史民俗博物館)
* 地域連携・教育ユニット副代表

阿 児 雄 之 (東京工業大学博物館)

伊藤 昭弘 (佐賀大学)

奥村 弘 (神戸大学大学院)

崎山 直樹 (千葉大学)

篠原 徹
(滋賀県立琵琶湖博物館)

島立 理子 (千葉県立中央博物館)

宮武 正登 (佐賀大学)

藪田 貫 (兵庫県立歴史博物館)

荒川 章二 (国立歴史民俗博物館)

小池 淳一 (国立歴史民俗博物館)

鈴木 卓治 (国立歴史民俗博物館)

関沢 まゆみ (国立歴史民俗博物館)

村木 二郎 (国立歴史民俗博物館)

メタ資料学研究センター・メンバーの紹介



センター長
林部 均 HAYASHIBE Hitoshi

研究部 教授

専門分野 日本考古学（主要研究課題：東アジアの王宮・王都の研究、考古学からみた古代地域社会の研究）



副センター長
後藤 真 GOTO Makoto

研究部 准教授

専門分野 人文情報学・情報歴史学・総合資料学（歴史情報のデジタル化やデジタル・アーカイブ、総合資料学の構築など）



三上 喜孝 MIKAMI Yoshitaka

研究部 准教授

専門分野 日本古代史（主要研究課題：東アジア文字文化交流史、古代地域社会史、貨幣史）



小倉 慈司 OGURA Shigeji

研究部 准教授

専門分野 日本古代史，史料学（主要研究課題：古代神祇制度、禁裏・公家文庫、延喜式）



内田 順子 UCHIDA Junko

研究部 准教授

専門分野 音楽学・民俗学（主要研究課題：音と社会の関りについての民俗学的研究）



天野 真志 AMANO Masashi

研究部 特任准教授

専門分野 日本近世・近代史，史料学（主要研究課題：近世・近代移行期政治・文化史、地域歴史文化の保存と継承）



橋本 雄太 HASHIMOTO Yuta

研究部 助教

専門分野 情報歴史学（主要研究課題：歴史資料を対象にしたクラウドソーシング、学習システムの構築）



渋谷 綾子 SHIBUTANI Ayako

研究部 特任助教

専門分野 考古学・文化財科学、総合資料学（主要研究課題：総合資料学、先史時代人の植物食文化と健康状態の復元）

2017年度 メタ資料学研究センターの活動

以下は開催予定のもの

2017年度

2017/4/8(Sat) 歴博講演会第399回「ザ・メイキング オブ デジタルで楽しむ歴史資料」(鈴木卓治)

2017/4/30(Sun) ニコニコ超会議「みんなで翻刻」(幕張メッセ、橋本雄太・後藤真・小倉慈司)

2017/5/13(Sat) 歴博講演会第400回「晩ご飯は何?資料のデンプンから探る昔の食べ物」(渋谷綾子)

2017/6/2(Fri) 人文情報ユニット研究会第1回(東京大学史料編纂所大会議室)

- ・報告1「史料編纂所歴史情報処理システムの今と新たな日本史情報の活用」
- ・報告2「歴史資料情報の共有と活用—荘園絵図データの活用を事例に—」
- ・報告3「字形画像による情報検索技術の可能性と課題」
- ・報告4「仏教研究におけるデジタル化資料の利活用」
- ・報告5「学習をベースにした災害史料クラウドソーシング翻刻」

2017/6/10(Sat)・6/11(Sun) 日本文化財科学会第34回大会(東北芸術工科大学、ポスター発表:渋谷綾子)

2017/6/22(Thu)・23(Fri) 第20回大学博物館等協議会・第12回博物科学会
(山形大学・小白川キャンパス、三上喜孝、後藤真・渋谷綾子・橋本雄太)

2017/7/13(Thu)・14(Fri) 第6回全国歴史民俗系博物館協議会年次集会(九州国立博物館、後藤真・渋谷綾子・島立理子)

2017/7/22(Sat)・7/23(Sun) 異分野連携ユニット研究会第1回(国立歴史民俗博物館大会議室・第一調査室)

- ・報告1「近世好古図譜研究の諸前提」
- ・報告2「『集古十種』版本の流布について」
- ・報告3「聆涛閣集古帖のデジタルデータ化と閲覧システム—IIFの活用—」

2017/7/30(Sun) 第5回地域史惣寄せ(鎌ヶ谷市中央公民館、後藤真)

2017/8/2(Wed) 異分野連携ユニット研究会第2回(国立歴史民俗博物館第一調査室)

- ・報告1「文書のカタチと成り立ち」
- ・報告2「正倉院文書自在閲覧システムの紹介」
- ・報告3「正倉院文書複製からわかる?原本所見—『正倉院文書目録』の記述内容—」
- ・報告4「正倉院文書複製の制作過程」

2017/8/8(Tue)~11(Fri) DH2017

(McGill University モントリオール〈カナダ〉、後藤真・渋谷綾子) <https://dh2017.adho.org/>

2017/8/30(Wed)~9/2(Sat) 第15回EAJS国際会議(リスボン〈ポルトガル〉、渋谷綾子) <http://www.eajs.eu/>

2017/9/6(Wed)~9/8(Fri) 地域連携・教育ユニット研究会第1回(小城市立歴史資料館ほか)

2017/9/13(Wed)~16(Sat) EAJRS 日本資料専門家欧州協会
(オスロ〈ノルウェー〉、後藤真・渋谷綾子・橋本雄太) <http://eajrs.net/>

2017/9/26(Tue) 人文情報ユニット研究会第2回(iPress 2017 第14回電子情報保存に関する国際会議日本語セッションのうち)
(京都大学国際科学イノベーション棟) <https://ipres2017.jp>

2017/10/9(Mon) 地域連携・教育ユニット研究会第2回(山形大学)

2017/11/13(Mon) 地域連携・教育ユニット研究会第3回(神戸大学)

2017/12/9(Sat)・12/10(Sun) 人文情報ユニット研究会第3回(大阪市立大学) じんもんこん2017と共催



ResourceのRをベースとし、古文書や軸物など歴史資料をはじめとする人文系のイメージと顕微鏡や虫眼鏡などの理系のイメージをあわせて総合資料学のめざす文理連携研究を象徴しています。



総合資料学ニュースレター 第3号 2017年(平成29)9月15日 発行

編集発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館 メタ資料学研究センター

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117番地
TEL 043-486-0123(代表) <http://www.metaresource.jp/>

印刷 株式会社 正文社